

## [その他]

## 地域とともに取り組む中越地震からの復旧・復興

- 人々の心にあかりを灯し続けた職員35名の500日間 -

上村 勤\*

## 1 はじめに

平成16年10月23日に発生した中越地震。震度6強の揺れに襲われた小千谷市立東小千谷小学校。本震及び度重なる余震の被害により、児童数428名中8名の児童の自宅が全壊、31名が半壊、15名の自宅が河川氾濫による浸水被害を受けた。学区は水道・ガス・電気のライフラインが断絶。電気は1週間後、水道は10日後、ガスは4週間後に復旧（但し給食室へのガス管復旧は2ヵ月後）した。10月25日、二つある体育館の一つが市指定の避難所（最大で避難者数220名）となった。校舎は至る所に窓ガラスの破損や壁面のひび割れ、物品の散乱が発生。南北校舎を結ぶ渡り廊下が通行不可能となった。

10月25日（月）。最初の児童安否確認を実施。この時点で学区内にあった公私含めて22箇所の避難所において359名の児童安否を確認。69名が所在不明。やけどや打撲等軽度の負傷児童が若干名いた。11月2日（金）には、91名が学区内避難所生活、19名が市内の学区外避難、53名が市外及び県外に避難中、そして残り265名は自宅及びその周辺での避難生活と判明した。

本論文は、この地震発生から校舎復旧がほぼ完了した平成18年3月末までの間、当校が行った地域への働き掛け、地域とともに行った復旧・復興にかかわる実践研究である。

## 2 研究の目的

何しろ未曾有の経験であったこの中越地震に際して、2年弱という短期間ではあるが、当校における復旧・復興の取組をつぶさに整理し、検討を加え、その成果を明らかにし、今後の防災教育の一助とすることを本研究の目的とする。なお、平成8年の阪神淡路大震災でも児童生徒や地域住民、校舎や地域環境に大きな被害があり、10年もの歳月をかけて復旧・復興を果たしていることから、当校における復旧・復興の取組の成果と比較検討する。

## 3 研究の方法

- (1) 「あかり」をキーワードにし、地域とともに取り組んだ震災からの復旧・復興活動の自己検証
- (2) 当校避難所で避難生活を送った保護者や、当時のPTA役員・町内会長・地域住民一部へのアンケート調査

## 4 実践の概要—学校再開と地域への支援—

## (1) 復旧・復興にかかわる二つの基本方針策定

10月24日。学校に到着した校長は、集合した教頭以下の教職員と被害状況を確認。次いで市役所関係者と避難所運営等について協議。その後、震災からの復旧・復興に当たっての二つの基本方針を提案し、職員間で確認し合った。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>①：「何とかして10月22日の生活に戻そう」⇒一日も早く学校再開にこぎつけよう</li><li>②：「子どもたちや地域に希望のあかりを灯し続けよう」⇒学校ができることを精一杯やろう</li></ol> |
|--|

この二つの基本方針は、その後、「あかりをとともそう すべての人に」という大横断幕の掲示や、2週間で不便を克服しての学校再開、そしてその後1年半余も継続する様々な地域への積極的な支援・情報発信活動につながっていく。

---

\* 津南町立津南原小学校

## (2) 学校再開に向けて（その1）：必要な業務整理と校内組織体制づくり

市当局は11月8日に市内全小・中学校の学校再開を決定。このことを受け、再開までの2週間、職員間で次のような必要業務を洗い出し、組織を立ち上げて対応することにした。

- 児童の掌握と情報把握、並びに教育的支援活動等（学級担任16名）⇒学区巡視、安否確認、たより配布等
- 校舎復旧作業（調理員、管理員、障害児アシスタント 計13名）⇒危険物除去、片付け、調理室復旧
- 避難所（体育館とグラウンド）支援活動（教頭、教務、研究主任、事務職員、学校栄養士）⇒避難本部（市職員）の指示による避難者安否確認、各種掲示板の設置と管理、非常用水手配、避難所支援物資の仕分け等

被災後1週目。被災後数日してようやく出勤できた職員も多かった。互いに不安を抱える中で、職員間の士気を高めるとともに十分な意見交換が必要と考え、職員朝会を毎日開いた。その結果、綿密な日程確認ができ連帯感が生まれた。

具体的活動は次の通りである。

- 10月25日（月）・校舎清掃作業、児童安否確認1回目（各町内毎に職員2名で）、臨時学校だより1号配布
- 10月26日（火）・職員朝会、児童安否確認2回目（各学年担当で）、調理室整備、清掃と危険物除去作業、職員終会
- 10月27日（水）・職員朝会、校舎内外清掃、危険物除去作業、調理室整備、職員終会（仮設トイレ設置される。）
- 10月28日（木）・職員朝会、児童安否確認3回目、校舎内外清掃、危険物除去作業、職員終会
- 10月29日（金）・職員朝会、児童安否確認4回目、臨時学校だより2号配布、校舎内外清掃と危険物除去作業

## (3) 学校再開に向けて（その2）：児童安否確認作業

400名の児童や家族の被災状況や心理状態、健康状態を正確に把握した上でなければ、学校再開の時期は決められない。正確さを期すために、複数職員での町内割り当て方式と記録の重要性が職員朝会で確認された。

1回目の安否確認は、13町内を職員2名以上のチームを組んでローラー作戦的に行った。児童名簿を持参し、①顔合わせができた児童、②訪問時に不在でも他の場所に避難していることが確実な児童、③所在が不明な児童、に分けて確認と記録を行った。学校に戻ると、記録をつき合わせて③の不明児童を再確認し、今度は電話連絡を試みた。その後、2～4回目の確認は、各担任が家庭訪問方式で児童・保護者と対面した。「元気?」「家の人はどこ?」「心配なことはない?」など、職員は積極的な声掛けはもちろん、家屋や道路、避難所の状況把握にも努めた。

また、児童一人一人の被害状況についての記録を残し、どの職員にも情報を共有しようというねらいから、「児童避難状況調査個票」を作成し、学級毎にファイルに綴った。この個票には、①被災時の状況（被災場所、一緒にいた家族、怪我等）、②避難の経過（月日と避難場所の推移、家族状況、本人の様子、職員の対応）が記載できるようにした。

## (4) 学校再開に向けて（その3）：臨時学校だよりによる情報発信

地震後数日間は、水汲みや荷物運びなど児童も貴重な労働力となる。食料供給やライフラインが少しずつ回復してくると、家財道具や住居の片付けや修理、職場への出勤が現実問題となり、逆に児童が避難していることがネックになる場合もある。「昼間だけでも学校に通ってもらいたい。元気に学校で友達と過ごしてもらいたい。」このような保護者の気持ちを配慮し、登校を待ち望んでいる児童・保護者のために学校再開への見通しを伝えるとともに、励ましの気持ちを込めて臨時休校中に臨時学校だよりを3回、学校再開直前の11月5日には定例だより1号を作成・発行した。

内容は次の通りである。

- ① 被災お見舞いの言葉（校長）と子どもたちへの励ましのメッセージ
- ② 学校再開の予定日とそれに向けた職員の努力紹介、学校の被災状況
- ③ 避難所生活のアドバイス（手強い励行、親子団欒、適度な運動、学校図書館の利用等）

この一連の学校だよりはすべて担任が各町内の避難所や家庭を訪問し、手渡しで配布した。配布忘れのないよう名簿にチェックしたり、留守宅



【写真1 学校と家庭との架け橋】

ではたよりを玄関に貼ったりして万全を期した。

## (5) 学校再開に向けて（その4）：11月8日（月）ついに再開！

地震発生から2週間。ただ単に授業が始まるのであれば、始業式と何ら変わらない。当校では、大きな不安と恐怖、ライフラインを絶たれた苦しい生活を経験してきた児童に、仲間や職員と一緒に過ごせる喜びや困難に負けない強い心と希望を育むスタートの日として位置付けた。苦しみも喜びも共有することで心の絆を強めようと、当日は児童と

職員に加え、避難所となった体育館で生活しているU町内住民からも出席してもらい、「東小立ち上がり集会」を2限に実施することにした。前日の7日。教科書を失くした児童が切ない思いをしないようにとプリント類を大量に準備した担任もいれば、仮設トイレの辛さを感じさせないようにとトイレ清掃に汗を流す職員もいた。

いよいよ、当日。職員が校門前で出迎え。428名中、411名が登校。県外など遠方避難児童が10名、体調不良者が7名であった。「立ち上がり集会」では、最初に震災物故者への黙祷。校長と避難町内会長の講話と続いた。「私達は帰るところが無い。しばらくの間、仲良くしてください。災害に負けずに努力し、被災地前の姿に戻りましょう。」というU町内会長の力強い言葉が体育館に響き渡った。この日のことを「子どもたちの声が教室に響いたあのときの喜びを一生忘れない。やっぱり学校はこうでなくては……。」と、ある担任は述懐している。

#### (6) 学校再開に向けて（その5）：給食再開に向けた取組

学校再開後、学用品の確保と並んで給食の実施が大きな課題であった。10月25日段階では、食器や調理器具は何と可使用可能。電気・水道は震災後2週間で復旧したが、地下のガス管が数ヶ所で破損し、使用不可。加熱調理や食器洗浄も不可能。協議の結果、ガス無しでもできる「簡易給食」という方法で再開が決定した。

簡易給食とは、主食（米飯やパン類）と飲み物、デザートのみメニューを言う。おかずは無い。加工した米飯（おにぎりや海苔巻きなど）や惣菜パンとして食欲をそそるようにした。当校の栄養職員と調理員が市教委や各校栄養職員と連絡を取り合い、献立を決めた。幸い、市外には施設の被害が軽く済んだ業者が多く、同居している東山小学校児童分も含めた約500食分の確保が可能であることが分かった。

##### ① 簡易給食スタート

11月10日までに給食室内や配膳スペースを清掃・整備した。お盆は洗浄が不可能のため使用せず。代わりに衛生面と廃棄の手間を考慮して、B4更紙を敷いて使った。10日の給食再開日には、「今日から給食が始まりました。ゆっくりゆっくりとよく噛んで味わってください。口の中に広がる今日の給食の味は、皆さんに勇気と笑顔を与えてくれるはずです。」という校長のメッセージが伝えられた。

実際、児童は一口ずつアップルパンの味を噛み締めながら食べていた。「パンだけだとすぐにお腹が空く。」という児童の声に対しては、コロッケなどの惣菜を挟んだパンを取り入れたり、デザートを工夫したりするとともに、十分に噛む指導を担当に行ってもらった。

下記のようなメニューは、野菜類がほとんどなく、野菜嫌いの児童にとっては残さずに完食できるメニューであった。また、簡易給食は配膳にも時間がかからず、担任の給食指導の負担も少なく済み、何よりも食べる時間が十分に確保でき、会話も弾むという利点があった。おそらく避難所でも満足な食事とはいえない児童が多かったであろう。児童には安心して食べられることへの感謝と喜びが感じられたようであった。

月日	メニュー
11月10日	アップルパン、プリン、牛乳
11月11日	おにぎり、ヨーグルト、牛乳
11月24日	稲荷寿司、海苔巻き、クレープ、牛乳
11月26日	ハンバーガー、みかん、牛乳



【写真2 簡易給食】

##### ② ガスの復旧と完全給食再開

ガス管が復旧し、加熱調理や食器洗浄が可能となり、12月8日から完全給食を再開した。東山小学校分の80食が増えたため、当初はメニュー数を減らし、洗浄食器数を減らして対応した。カロリー不足とならないよう、一つの献立の分量を1.5倍にした。依然として余震が続いたため、作業の危険な揚げ物は取り止めた。給食室での加熱調理が始まると、いい香りが校舎中に立ち込め、給食再開の実感が児童にも職員にも沸いてきた。簡易給食のときもそうであったが、残食量はほぼゼロ。「おいしかった。」と口々に児童は喜んでいった。温かい食事はほぼ1ヶ月半ぶりであり、食べ物の大切さや食べられることのありがたさに気付いた児童が多かった。

##### ③ 児童の感想より（簡易給食開始後1週間の時点）

本当にひさしぶりに元通りの給食を食べました。クリームシチューは温かくて、私の心もあったまる感じがしました。口の中ですとろけました。二日間も残す人がいなくてびっくりしました。調理員さんも、「やっと全校の給食を作ることができたよ。」とよろこんでいました。（4年Y子）

#### (7) 地域への支援（その1）：避難所避難者への支援活動

教務室の安否確認電話が鳴る。仮設トイレ等の避難所環境整備に伴う問い合わせなどに親身になって対応することも職員の任務の一つ。教頭を中心に教務主任、養護教諭、学校栄養職員が次のような業務をこなし続けた。

### ① 正確な安否確認

先ず避難者名簿を作成した。名簿用紙を印刷し、避難本部を通して町内会長や町内班長が記入作業を行う。これを教務室の電話口に置き、問い合わせ電話に対して名簿で確認した後、避難所に向いて呼び出す。外出中のこともあるため、不在の際は町内会長や班長等の責任者に問い合わせるなどして、正確な安否確認に努めた。

### ② 心も照らす避難所のライトアップ

震災翌日、電力会社に配備を要請していた発電車が到着。避難者用の仮設トイレに照明を点けた。しかし、トイレ以外は夜が真っ暗。そこで、「あかりが地域に活力を与えるはず。夕暮れ時にも安全に移動できるよう、励ましの言葉代わりに避難者の心に少しでもあかりを灯そう。」という校長の発案で、校舎中の電灯を夕方5時から7時までの2時間、点灯することにした。グラウンドに自衛隊が共同浴場を設置し、毎日100人を超える利用者が出入りしており、「足元が明るくなって助かった。子どもたちの元気な声が校舎内に響くようで元気が出る。」と歓迎する避難者の声が多く聞かれた。このライトアップは12月4日の体育館避難所が閉鎖されるまでの約40日間、毎日続けた。

### ③ 地域そして避難者へのエール ―「あかり横断幕」の設置―



【写真3 校舎正面の「あかり横断幕」】

11月初旬に、学校出入りの教材会社社長O氏より、「学校行事等に使って欲しい。」とズック地の幕（縦90cm、横13m）と赤と青のペンキ塗料の寄付があった。用途について職員間で相談した結果、「避難している人々への激励のメッセージを書いて校舎に掲げてはどうか。」という意見が出され、メッセージの言葉として、人々の心を明るくする意味で『あかり』をキーワードに入れた『あかりをともそう すべての人に』とした。

### ④ 避難所生活者の心に潤いを ―各種学校行事へのいざない―

震度4以上の余震が続き、避難指示がなかなか解除されないU町内をはじめ、避難住民にも焦りの色が見え始めてきた。僅かシャッター1枚で仕切られた体育館にいる避難者に少しでも元気を出してもらおうというねらいで、音楽朝会への参観や全校漢字キャンペーンへの参加を誘ってみた。

#### ア) 心に染み入る音楽朝会へどうぞ

11月17日は3年生の音楽朝会。避難者の大半は学区内のU町内住民である。事前に町内会長に招待を打診したところ、快諾を得た。当日は10数名の老若男女が参観。児童の奏でるリコーダー演奏『エーデルワイス』、全校斉唱『ビリーブ』の発表。楽器の澄んだ音色と児童の懸命な歌声が西体育館に響き渡った。じっと聴き入っている人、涙をこらえ切れずに流している人。思わずもらい泣きをした職員もいた。

#### イ) 全校漢字キャンペーン「私の心に残る漢字、大募集！」

12月7日の全校漢字テストに先駆け、漢字に対する興味をもたせようと「心に残る漢字」を全校児童に募集した。U町内避難者にも呼びかけたところ、「家、遊、空、笑、家族」など、避難者の今の心境が映し出されるような漢字が寄せられた。これらの漢字は国語部職員が大書し、応募者のコメントを添えて児童玄関横に掲示した。立ち止まってじっと見入る児童が多くいた。

### (8) 地域への支援（その2）：地域と共に歩んだ各種活動

「地域あつての学校・学校あつての地域」といわれる。学期の区切りや節目となる大きな学校行事において、当校の復旧・復興を地域に知らせるとともに地域と共に復旧・復興に取り組むことを職員間で共通理解して取り組んでいった。

#### ① 「街角終業式」

地域の商店街では、店舗再開をした所もあれば、依然として被災当時のまま手付かずの所や取り壊して撤退する大型スーパーもあり、悲喜こもごもであった。そこで、年の瀬を迎えたこの時期に、被災しながらも懸命に学校生活を送っている児童の姿を地域住民に見てもらうことで、地域に活力を与えることが可能ではと考え、終業式を当校から歩いて5分の地元商店街アーケード内で行うことにした。初めに校長の挨拶、次いで商店街組合長K氏の激励の言葉、そして学年プラカードを先頭にアーケード内を練り歩き、「地震に負けずにがんばってください。」「新年は勉強をもっともっとがんばります。」などと事前に行った約1800枚のメッセージカードを携えて、街行く人々や商店主に手渡していった。「子どもたちのにこにこした笑顔がかわいらしかった。大人も頑張らねばという気持ちが沸いてきた。」と、ある店主は歓迎していた。「たなが少しこわれていたけれど、品物がた



【写真4 街角で元気を】

くさんならんでいた。『がんばってね』と店の人に言われてうれしかった。」と声を弾ませる子もいた。

## ② 統合80周年記念事業

平成17年度は、当校の統合80周年の年。「統合80周年実行委員会」では、地域に寄付を仰がないこと、被害のあった校舎内外の環境整備を記念事業の中心に据えること、PTAによる労力奉仕で推進することを柱とする修正案を作成した。倒壊寸前のグラウンド用具小屋と農具小屋の解体と別棟の建設、中庭の人工流水路の修復に着手。シャッター取り付けやペンキ塗装などもあったが、塗装業と建築業を営む本職の保護者も加わり、見違えるような環境に整備された。

## ③ 震災復興記念歌『希望の明日へ』

17年度を迎え、「震災の記憶を風化させてはならない。復興の道半ばではあるが、一応の成果が得られた喜びを何らかの形に残そう。」と、震災復旧・復興にちなんだ歌を作ることが決まった。

国語・音楽部職員による「記念歌作成部」が組織され、2年生以上から「震災時の苦労や学んだこと、復旧・復興にかかわる言葉」を募集し、それに職員が補作して2番からなる歌詞が整えられた。並行して、「苦しみを乗り越え、明日に希望をつなぐイメージ」を音楽主任が中心となり、覚えやすかつ勇気を奮い立たせるオリジナルのメロディが作られた。より心に響くものを目指そうと歌詞・曲ともに、2度の職員会議で修正を重ね、10月初めに震災復興記念歌『希望の明日へ』が完成。歌詞に込められた願いを児童に十分伝えた上で、学級朝会等で何度も歌い継いだ。

平成17年10月30日（日）。1年前まで避難所となっていた東体育館で統合80周年記念式典と学習発表会を実施。各学年発表の後、約800名の観衆の前で全校児童と職員が『希望の明日へ』を披露した。

『希望の 明日へ』 作詞・作曲：東小千谷小学校児童・職員

- |                                  |                                  |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1 緑豊かな 東の大地 不安をかえた 大きなゆれに        | 2 ほほをつたつた なみだの数と かわした言葉 忘れないよね   |
| 小さな光 さがし求めて 心ひとつに かけぬけた          | 支えてくれた 人のやさしさ 希望と勇気 ありがとう        |
| 励ましあえば こわくないから しっかり手を結び合い 今を生きよう | 励ましあえば こわくないから しっかり手を結び合い 今を生きよう |
| 宝箱には 夢をつめて 仲間たちとともに あすへ進もう       | 宝箱には 夢をつめて 仲間たちとともに あすへ進もう       |
|                                  | 東の空に 夢を求めて 笑顔たやさないで 強く生きよう（繰り返し） |

## 5 実践の検証

以上の実践に対する検証方法の一つとして、保護者と地域住民の一部に対してアンケート調査を行った。このアンケートは、これまで述べてきた各々の実践に対して「とてもよかった・まあよかった・あまりよくなかった・よくなかった」の4択で答えるものと、数問毎に自由記述欄とを設けたものである。調査対象者は、避難指示により当校体育館に2ヶ月間避難したU地区の保護者15名、平成16・17年度のPTA正副会長6名、平成16年度の学区町内会長15名と学区民生児童委員12名、「街角終業式」を行った二つの商店街店主10名の計58名。平成18年8月15日に質問用紙を郵送し、同月31日までに郵送で回答のあった34通（回収率65.5%）を集計した。

### (1) 集計結果

(単位 人)

質 問 項 目	とてもよかった	まあよかった	あまりよくない	よくなかった	無回答
○10月25日～29日にかけて担任が何度か各町内を回って児童の安否確認をしたことは？	26	2	1	0	5
○10月25日～11月5日にかけて、計4回の「臨時学校だより」を配布したことは？	27	0	1	0	6
○給食室のガスが復旧するまで、パン・おにぎり・牛乳などの簡易給食を実施したことは？	23	4	0	0	7
○夕方5時から7時まで、避難所周辺を照らすために校舎内の電灯を点けたことは？	22	5	0	0	7
○人々を元気付けるために「あかりをともしよう すべての人に」という横断幕を校舎屋上に掲示したことは？	19	9	0	0	6
○東体育館避難所の方々に音楽朝会出席や「私の心に残る漢字大募集」を呼びかけたことは？	13	9	0	0	12
○児童の元気な姿を見てもらい、併せて地域を励ますねらいで「街角終業式」を商店街で行ったことは？	16	9	3	0	6
○統合80周年記念事業を、地域の寄付を頼らずに校舎内外の復旧作業を中心にしたことは？	24	8	0	0	2
○統合80周年記念学習発表会で、児童・職員合作の『希望の明日へ』を歌ったことは？	29	1	0	0	4

### (2) 自由記述内容

- ①安否確認：町内を職員が回る姿を見て安心感をもったし、地域の者も児童に対して注意していくようになった（商店街店主）。担任の顔を見て親子が安心できた。とても親身になってくれていた（P役員）。

- ②簡易給食：親として助かった。あの状況ではあの方法をと子供に示す場面となった（P役員）。メニューが可哀想だった。避難所の方が良い物を食べていた（商店街店主）。学校がそこまでやる必要があるのか（民生委員）。
- ③避難所支援：中・高校生に夜間学習場を開放してもらい、助かった（U町内保護者）。「地域の中の学校」を体現できて良かった（町内会長）。学校行事に参加を呼びかけるなどの温かい心配りが嬉しかった（民生委員）。
- ④街角終業式：子供の明るい顔と声にどれほど励まされたことか。地震の記憶を引きずった心の不安定な時期だったので良い事だった。（U町内保護者）。案内を十分に行ったのか。全く印象に残っていない（商店街店主）。
- ⑤『希望の明日へ』：聞きながら涙があふれた。心に温かさと希望がふつふつと沸いてきた。大変感動的だったが、もっとTV局などにPRしてもよかった。当校の象徴として未永く歌い継がれるようにしたい（P役員）。
- ⑥その他：学校と地域と一体となり、いろいろ取り組んでもらったと感じている。児童には貴重な体験となるだろう。震災を生きた教材として教育活動を展開した点を大いに評価したい（民生委員）。

### (3) アンケート集約結果の考察

このアンケートは、震災復旧・復興において当校が地域と共同して取り組んだ実践を検証する鍵ともなる。自由記述の中には、様々な実践に対しての疑問の声や改善の余地を示唆する貴重な意見があった。全質問を通して、回答総数の80.9%が肯定的（とてもよい・まあよい）であったことは、当校の実践が概ね保護者・地域住民に受け入れられたと判断できるのではないかと。特に、震災直後の安否確認や臨時学校だより配布、『希望の明日』発表については、「とてもよい」とする回答数が他に比べて高かった。これは、「誠意ある職員の行動」や「学校情報の的確な発信」、「児童と職員の交流」という教育の不易の部分が非常時においても極めて重要であり、地域に対する高い信頼感を呼び起こすことを実証している。「『先生また来てね。』と声を掛けてくれる避難所の子どもたち。人と人との交わりの場の大切さを心に刻み込んだ1週間だった。」という20代の担任の述懐が印象的だった。

## 6 研究のまとめ

阪神淡路大震災後の『震災を越えて（兵庫県教委）』では、「被災した児童生徒にとって学校が再開され、日常生活を取り戻すことは、同時に安定した心を取り戻すきっかけになった。学校再開は、心のケアの上からも重要な意味を持つ。」とある。さらに「子どもたち（学校）が動けば町が動く。学校から地域に働きかけることがスタートである。」とも報告している。これは、当校の震災復旧・復興の基本方針「①一日も早い学校再開」の取組と共通であり、アンケート結果とも合致する。

また、同震災後の『学校等防災体制の充実について—第1次報告—（文科省）』では、学校（教職員）と地域との関連性について、次の点を成果としてまとめている。

- ①教職員が避難所運営において重要な役割を担い、学校は地域コミュニティの中核として大きな役割を果たした。
  - ②校長をはじめ教職員の献身的努力が秩序を確保し、住民を支え、自立を促し、復興への大きな推進力になった。
- この2点は、当校の基本方針「②地域への支援」の取組とも共通しており、アンケート結果とも合致する。

なお、阪神淡路大震災時との相違点については、当研究の範囲内では明確にはならなかった。

地震をきっかけとして児童の心に刻まれた「地域住民への感謝の気持ち」や「皆で助け合うことの大切さ」などは時間の流れとともに次第に薄れつつある。「震災＝貴重な体験であり、学び続ける価値のあるもの」という認識を今一度地域に伝える必要がある。平成18年3月末で地震後500日が経つ。震災直後、職員が必死になって児童や地域の人々の心の中に灯してきた小さな「あかり」を、今後も決して絶やすことなく赤々と燃やし続ける一人になりたい。

### 【引用、参考にした資料・文献等】

- 1) 文部科学省 「学校等の防災体制の充実について 第一次報告」 平成7年11月
- 2) 兵庫県教育委員会 「震災を越えて—教育の創造的復興10年と明日への歩み—」 平成17年3月
- 3) 兵庫県教育委員会 「阪神・淡路大震災8周年教育復興の集い報告集」 平成15年3月
- 4) 新潟県教育委員会中越教育事務所 「いま学校は そのとき学校は」 平成17年3月